



ANNUAL REPORT 2025

公益財団法人 日本水泳連盟
Japan Aquatics



日本水泳連盟の理念・使命・行動指針

PHILOSOPHY

MISSION

ACTION GUIDELINES

理念

水泳を通じて、国民の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する

使命

強化：センターポールに日の丸を！
競技力向上に努め、センターポールに日の丸を掲げ、人々に勇気と希望を与える

普及：国民皆泳
水泳の普及に努め、国民皆泳を実現し、人々の健康保持・増進と水難事故防止に貢献する

行動指針

1. 競技力の更なる高みを目指す
2. 水泳の楽しさと喜びを伝える
3. 水泳を通じた教育と交流の輪を広げる
4. 水泳ニッポンの歴史と伝統を明日へつなぐ

CONTENTS



水泳ニッポン中期計画
2025 - 2032



AQUACREW



- 1 日本水泳連盟の理念・使命・行動指針
- 2 目次
- 3 鈴木大地会長挨拶
- 4 世界水泳選手権 2025 シンガポールレポート
- 5 ワールドユニバーシティゲームズ
・世界ジュニア選手権レポート
- 6 Japan Aquatics Awards 2025
2025 年に活躍した選手たち
- 8 競技力向上事業
- 9 競技力向上事業 <科学事業> <医事事業>
- 10 競技力向上事業 <アンチ・ドーピング事業>
- 11 競技運営推進事業
- 12 普及事業
- 13 総務関係事業
- 14 2025年度 数字で読む日本水泳連盟(JAQUA)

Photo by PHOTO KISHIMOTO

GREETINGS

御挨拶



会長 鈴木 大地

2025 年は「水泳ニッポン・新時代構想」ならびに中期計画 2025-2032 の実現に向けた新たな挑戦を本格的に始動させた一年となりました。「センターポールに日の丸を」という使命を継承しながら、競技成績のみならず、水泳が持つ社会的価値をさらに広げるべく、水泳を「THE BASIC SPORTS」と再定義し、「水の国を、楽しみ尽くそう。」のスローガンのもと、競技力向上、普及、社会貢献、人材育成、組織基盤強化を柱とする中期戦略を推進。「泳ぐ」だけでなく、“水とともに生きる”という幅広い価値を社会へ発信してまいりました。

一方で水泳界を取り巻く環境は大きく変化しております。そのような中においても、水泳は「命を守るスポーツ」であり、人々の健康づくり、生涯スポーツ、防災教育、地域コミュニティ形成など、社会に対して大きな役割を果たす存在であることを改めて認識し、その価値を次世代へ継承するための取り組みを進めてまいりました。

選手派遣および選手強化事業では、シンガポールで開催された世界水泳選手権にて各種別で好成績を収め、若手選手の台頭と強化事業の成果が随所に見られたことで未来に向けた大きな期待を抱かせる結果となりました。これらの成果は選手強化事業が着実に実を結んでいる証であり、日本水泳界に大きな希望をもたらすものとなりました。

競技大会開催事業では、世界水泳選手権（福岡）において実証した国際基準の質の高い大会運営ノウハウを継続・発展させるとともに、国内競技会において主管団体と連携し、全国で統一された高水準の競技会運営を実施しました。

競技条件整備事業では、競技者登録管理システム「WebSWMSYS」および競技会記録速報ツール「超速」の安定運用と機能拡充を推進しました。競技現場の利便性向上を図るとともに、デジタル技術を活用した競技運営基盤の強化に取り組みしました。

普及・指導者養成事業では、指導者養成3委員会による協議・協

働を継続し、スポーツ文化の創造およびスポーツの社会的価値向上に貢献できる指導者の養成に努めました。また、学校体育における水泳授業の民間委託や、学校部活動の地域展開等が加速する中、指導力の向上と平準化、さらには資格取得の推進に向けた施策を進めております。「水泳の日」、「泳力検定制度」、「スイムスマイルプロジェクト」を通じて、水泳の楽しさを広く発信するとともに、「する・みる・ささえる」すべての仲間=AQUA CREW の拡大に努めました。加えて、水泳は「命を守ることができるスポーツ」であるという社会的価値を改めて認識し、水難事故防止や国民皆泳の理念実現に向けた啓発活動を推進しました。

組織運営においては、「スポーツ団体ガバナンスコード＜中央競技団体向け＞」への適合を継続し、ガバナンス強化、コンプライアンス徹底、スポーツ・インテグリティの向上に努めました。また、「水泳ニッポン・新時代構想」の進捗管理を進めるとともに、自主財源の確立、マーケティング活動、広報・PR 活動の強化にも注力しました。

財務面では、物価高騰等による支出増加への対応を図りながら、協賛・スポンサー各社からのご支援、マーケティング活動の推進、各種自主財源確保施策により、本年度事業に必要な財源の確保に努めました。ここに、ご支援ご協力を賜りました加盟団体、関係団体、協賛・スポンサー各社の皆様に、心より感謝と御礼を申し上げます。

結びになりますが、日本水泳界は次の 100 年に向け、新たなステージへの挑戦を本格化させています。「センターポールに日の丸を」という強い決意のもと、世界で活躍する選手を継続して輩出し、「水泳ニッポン」の価値をさらに高めてまいります。そのためにも、各加盟団体との情報共有と意思疎通をこれまで以上に密に図り、水泳界が一丸となった「オールジャパン体制」をより強固なものとしてまいります。今後とも、皆様のなご一層のご支援ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

ガバナンスコード



免税募金について



世界水泳選手権 2025 / シンガポール

5 種別でメダル 8 獲得で復活の狼煙を上げる



7月11日から8月3日、シンガポールにて世界水泳選手権 2025 が開幕。まずは OWS から日本に朗報が届く。海上の状況から1日延期となり、男子と同日のスタートとなった女子10kmで梶本一花（同志社大学／枚方SS）が8位に入り、日本女子初となる入賞を果たす。勢いに乗った梶本は5kmで銅メダルを獲得。さらに3kmノックアウト（1km×3ラウンド）では、最終ラウンドスタート直後にキャップが脱げるアクシデントがあったものの、後半の巻き返しで逆転。日本初となる金メダリストに輝いた。

梶本の活躍に背中を押されたのは、女子水球。予選リーグからクロスオーバーゲームでイギリスに勝利し、史上初の決勝トーナメント進出を決める。決勝トーナメントでは勝利を収めることはできなかったが、史上初の8位入賞を勝ち取った。

男子水球はクロスオーバーゲームでのセルビア戦で敗れ順位決定戦に回ったものの、ブラジル、ルーマニアに勝利して過去最高順位タイとなる9位で大会を終えた。

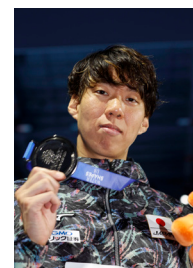
飛込では男女それぞれ2人ずつの4人で挑むチームイベントに初参戦。坂井丞（ミキハウス）、西田玲雄（岡三リビック／大阪水泳学校）、三上紗也可（日

本体育大学大学院／米子DC）、金戸凜（日本大学／セントラルスポーツ）が、それぞれ思い切った演技を見せ、最後に飛んだ西田・金戸の10mミックスシンクロで Neutral Athletes B（ロシア）を逆転して銅メダルを獲得する。

パリ五輪後に選手が大きく入れ替わり、若手中心に世代交代したアーティスティックスイミングでは、『武士道』をテーマに挑んだチームフリーで銀メダルに輝いた。

大会を締めくくる競泳は、大会3日目の男子200m自由形決勝で、村佐達也（中央大学／イトマン東京）が8位から6位、5位とターンごとに順位を上げていき、ラスト50mでさらに2人抜きフィニッシュ。1分44秒54の日本新記録で銅メダルを勝ち取る。後半戦に入り、男子200m平泳ぎで渡辺一平（TOYOTA）が2分07秒70で銀メダルを獲得し、最終日には400m個人メドレーで松下知之（東洋大学／スウィン宇都宮）と成田実生（ルネサンス／明治大学）がともに銀メダルを獲得した。

世界水泳選手権 2025 の大会を通して、メダルは8つ獲得。OWSで日本初のメダル、さらに競泳でも若手が世界大会で初のメダルを獲得するなどの成長を遂げ、ロサンゼルスオリンピックに向かう大きな第一歩を踏み出した。



高校生・大学生選手たちも順調に成長

国際大会で若い力が躍動

世界ジュニア選手権は、直前の国内大会で驚異的な自己ベストを連発し、一躍金メダル候補に名を挙げた大橋信（枚方 SS / 四條畷学園）に注目が集まった。結果として、タイム的には国内大会以上とまではいかなかったが、100m では 59 秒 50、200m では 2 分 07 秒 56 でともに 2 位と、ハイレベルな争いのなかで表彰台を勝ち取った。50m では日本高校記録となる 27 秒 12 で銅メダルを獲得し、3 種目で 3 つのメダルを獲得した。また世界水泳選手権代表でもあった今福和志は 800m 自由形で 7 分 48 秒 34 の日本新記録を更新して 2 位。1500m でも 14 分 56 秒 97 で 2 位に入る活躍を見せた。今福同様に世界水泳選手権を経験した平井瑞希（TOKIO インカラミ）は 50m バタフライでベストを更新して 2 位、100m バタフライでは 56 秒 87 で金メダルに輝いた。

また、この大会で大きく成長したのは沼田頼人（豊川）である。200m 自由形で大きく自己ベストを更新して 3 位に入り、200m 個人メドレーでも自己ベストを 1 秒近く更新して銅メダルを獲得。400m 個人メドレーでは、ライバルの小島夢貴（豊川）を下し、こちらもベスト更新の 4 分 11 秒 37 で金メダルを獲得する活躍を見せた。

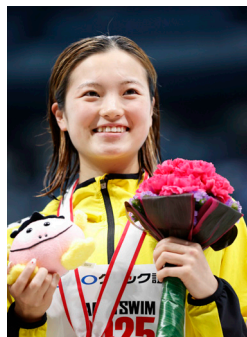
小島は沼田に 400m では敗れたものの、200m では日本高校新記録となる 1

分 57 秒 32 をマークして銀メダルを獲得する。また、男子の 4 × 100m フリーリレー、4 × 200m フリーリレー、4 × 100m メドレーリレーの 3 種目でも高校記録が樹立され、国際大会というプレッシャーのかかる舞台であっても、物怖じせず自分の力を出し切った選手たちの活躍は、必ず今後につながるだろう。

高校生らに負けじと、ワールドユニバーシティゲームズでは大学生たちが奮起。アメリカに次ぐ 15 個のメダルを獲得した。

なかでも森拓海（国士舘大学 / コナミスポーツ）が 200m 個人メドレーで 1 分 57 秒 24 の大会新記録で優勝。400m でも優勝して 2 冠を達成した。女子では楠田夢乃（藤村 SS / 中央大学）が 200m 平泳ぎで 2 分 26 秒 15 で 1 位、小島優々美（神奈川大 / NECGSC 玉川）が 2 位に入って日本人ワンツーフィニッシュを果たした。男子 4 × 100m フリーリレーでは日本学生新記録を樹立した。

世界ジュニア選手権、ワールドユニバーシティゲームズに共通していたのは、チームがひとつにまとまっていたことだ。結果が良ければ共に喜び、悪ければ全員で励まし、リレーで全力を尽くす。その経験が、必ずその先へと繋がっていくだろう。



Japan Aquatics Awards 2025

2025 年に活躍した選手たち

① 最優秀・優秀選手賞

(最優秀選手)・オープンウォータースイミング

	梶本 一花 (かじもと いちか) 22	同志社大学 (4年) ・枚方スイミングスクール
(優秀選手)	・競泳	
	松本 周也 (まつもと しゅうや) 25	ひまわりネットワーク株式会社
	村佐 達也 (むらさ たつや) 19	中央大学 (1年)・イトマン東京
	今福 和志 (いまふく かずし) 18	四條畷学園高等学校 (3年)・ 枚方スイミングスクール
	深沢 大和 (ふかさわ やまと) 25	東急株式会社・ 東急スイミングスクールあざみ野
	渡辺 一平 (わたなべ いっぺい) 29	トヨタ自動車株式会社
	松下 知之 (まつした ともしき) 20	東洋大学 (2年) ・スウィン宇都宮スイミングスクール
	牧野 航介 (まきの こうすけ) 21	東洋大学 (3年)
	西川 我咲 (にしかわ あさき) 19	東洋大学 (1年) ・K1スポーツ春日井スイミングスクール
	成田 実生 (なりた みお) 19	明治大学 (1年) ・スガーツクラブ ルネサンス
	鈴木 聡美 (すずき さとみ) 35	ミキハウス
	平井 瑞希 (ひらい みずき) 19	TOKIO インカラミ ・アリーナつきみ野スポーツクラブ
	小堀 優加 (こぼり わか) 25	あいおいニッセイ同和損害保険株式会社 ・相模原市水泳協会
	池本 凧沙 (いけもと なぎさ) 23	イトマン東京
	難波 実夢 (なんば みゆ) 23	JSS東京
	高橋 美紀 (たかはし みき) 30	林テレンプ株式会社 ・アリーナつきみ野スポーツクラブ
	松山 陸 (まつやま りく) 24	株式会社サイサン・ガスワン
	谷口 卓 (たにぐち たく) 24	GSTR GRAND PRIX
	森 拓海 (もり たくみ) 22	国士館大学 (4年) ・コナミスポーツ
	楠田 夢乃 (くすだ ゆめの) 20	中央大学 (2年) ・藤村スイムスクール

・飛込

	玉井 陸斗 (たまい りくと) 19	立命館大学 (1年) ・滋賀・立命館ダイビングクラブ
	大久保 柊 (おおくぼ しゅう) 29	昭和化学工業株式会社 ・東京スイミングセンター
	三上紗也可 (みかみ さやか) 25	日本体育大学大学院 ・米子ダイビングクラブ

・水球

	稲場 晴香 (いなば はるか) 23	滋賀県スポーツ協会 ・秀明大学水球クラブ
	有馬 優美 (ありま ゆうみ) 28	宮崎県スポーツ協会 ・Violet stars
	稲場 朱里 (いなば あかり) 28	株式会社電算システム ・秀明大学水球クラブ
	浦 映月 (うら えるな) 23	宮崎県スポーツ協会 ・ブルボンウォーターポロクラブ柏崎
	河口 華子 (かわぐち かこ) 26	公益財団法人 山口県スポーツ協会 ・NSSU Water Polo Club
	設楽ひかる (したら ひかる) 26	(株)イカイ ・NSSU Water Polo Club
	砂邊 亜衣 (すなべ あい) 23	滋賀県スポーツ協会 ・秀明大学水球クラブ
	関根 桜彩 (せきね さあや) 23	滋賀県スポーツ協会 ・秀明大学水球クラブ
	大坪 莉子 (おおつぼ りこ) 21	秀明大学 (3年) ・秀明大学水球クラブ
	西山 風花 (にしやま ふうか) 25	NSSU Water Polo Club
	井上 萌々 (いのうえ もも) 23	株式会社電算システム ・秀明大学水球クラブ
	小林 真穂 (こばやし まほ) 20	秀明大学 (2年) ・秀明大学水球クラブ
	野田 菜波 (のだ まなみ) 26	宮崎県スポーツ協会 ・Violet stars
	福田 星香 (ふくだ しょうか) 20	日本体育大学 (2年) ・NSSU Water Polo Club
	蛭川 百音 (ひなぐわ ももね) 23	NSSU Water Polo Club

・アーティスティックスイミング

	比嘉 もえ (ひが もえ) 18	四天王寺高等学校 (3年) 公益社団法人 井村アーティスティックスイミングクラブ
	佐藤 友花 (さとう ともか) 24	ジョイフルアスレティッククラブ
	小林 唄 (こばやし うた) 23	ホクト株式会社 ・長野アーティスティックスイミングクラブ
	藤井 萌夏 (ふじい もか) 21	中京大学 (3年) ・ザ・クラブ ビア・88
	川瀬 由華 (かわせ ゆうか) 24	センコーグループホールディングス株式会社 公益社団法人 井村アーティスティックスイミングクラブ
	相高 花帆 (あいたか かほ) 18	滋徳栄高等学校 (3年) ・ミキハウス東京アーティスティックスイミングクラブ
	白波瀬菜桜 (しらはせ なお) 18	国士館高等学校 (3年) ・国士館 AS クラブ
	内田 桜子 (うちだ さくらこ) 20	早稲田大学 (2年) ・ミキハウス東京アーティスティックスイミングクラブ
	熊谷日奈多 (くまがい ひなた) 24	公益社団法人 井村アーティスティックスイミングクラブ

(最優秀コーチ)・オープンウォータースイミング

	太田 伸 (おおた しん)	枚方スイミングスクール
--	---------------	-------------

(特別賞)・飛込

	坂井 丞 (さかい しょう) 33	ミキハウス
	金戸 凜 (かねと りん) 22	日本大学 (4年) ・セントラルスポーツ
	西田 玲雄 (にしだ れお) 25	岡三リビング株式会社 ・大阪水泳学校



② 東京運動記者クラブ水泳分科会新人賞

	村佐 達也	
--	-------	--

③ アリーナスプリント賞

(男子) 第1位	松本 周也	
第2位	難波 暉	
第3位	中村 克	
(女子) 第1位	池江 璃花子	
第2位	平井 瑞希	
第3位	神野 ゆめ	

④ スポーツ関係団体表彰・

日本スポーツ賞 (読売新聞社)

競技団体別最優秀賞	梶本 一花	同志社大学 (4年) ・枚方スイミングスクール
-----------	-------	----------------------------

テレビ朝日ビッグスポーツ賞 (テレビ朝日)

ビッグスポーツ賞	梶本 一花	同志社大学 (4年) ・枚方スイミングスクール
ビッグスポーツ新人賞	村佐 達也	中央大学 (1年)・イトマン東京

⑤ 日本記録賞 長水路日本記録賞

(男子)	谷口 卓 / 五味 智信
(女子)	平井 瑞希



水の国を、楽しみ尽くそう。

人類の起源は、水の中。
ひとりひとりが生まれる時も、水の中から。
そう考えるとわたしたちは、
生物として根本的に、水とつながっている。
ましてや日本は、水の国。
水と関わり合いのない生活を送る方が、
むしろ不自然でさえある。

だからこそわたしたち日本水泳連盟は、
「国民皆泳」を掲げる。
幼少期の体力から、老年期の健康まで、
水とともに生きていく。
水を楽しみ尽くすことは、人生を楽しみ尽くすこと。
この星に生まれた人類は、宇宙でもっとも運がいい。
この国に生まれた人たちは、地球でもっとも運がいい。



JAQUA®

公益財団法人 日本水泳連盟
Japan Aquatics

競技力向上事業

2025 年度は「金メダルを含む複数人のメダリスト輩出」、「パリオリンピックを上回る 14 以上の入賞数」をテーマに掲げ、ロサンゼルスオリンピックを見据えた強化戦略を進めた。

競泳においてはオリンピック・世界水泳選手権の過去 5 大会の実績から算出した新たな標準記録（1 位：S、3 位：A、8 位：B）を今後 3 年間固定し、突破者を増やすことを最重要課題とした。次世代の育成としてシニアの代表合宿にジュニアエリートを合流させるなどの合同強化を推進し、ジュニアとシニアの融合に取り組んだ。また、実戦シミュレーションとして現地合宿を通じて環境適応力と実戦対応力を強化する計画を進めつつ、本戦の予選や準決勝で自己ベスト（PB）に対して 99%以上のパフォーマンスを発揮することを戦略目標とすることでパフォーマンスの再現性向上を図った。

結果として、世界水泳選手権において、銀メダル 3、銅メダル 1 を獲得し、入賞数も 16 となりパリオリンピック（13）を上回り目標を達成。メダル獲得レベルの「インターナショナル A」標準記録を男子 2 名、女子 1 名が突破し、世界水泳選手権でのパーソナルベスト達成率は 99.12%（予選・準決勝・決勝の最速記録）となり、パリオリンピック（98.68%）から改善が見られた。

今後は「銀・銅メダルをいかに金へとつなげていくか」を課題とし、特定の「メダルターゲット」に対する重点強化、予選からの高パフォーマンスの追求と再現性、指標の固定化と「勝負強さ」の育成、国際大会本番で標準記録をクリアできる「勝負強さ」、メダリストを担当する 30 代・40 代の若手・中堅コーチの国際的なスペシャリストとしての育成を支援し「スペシャリスト化」を図り、総合力を高めていく。

飛込では、玉井陸斗や、世界水泳選手権メダリストの三上紗也可をメダルターゲット選手に決めて、中心に強化。また、オリンピックオリフィケーションのシステムが変わったため、積極的に World Aquatics の試合に出場することが求められるようになった。

水球は国内ではリーグ戦など持続的な強化環境が十分整っていないため、代



表選手になりうるレベルの選手達は積極的に海外のクラブチームに入り、継続的な強化を積んでいる。その成果として、当たり負けしない肉体と精神力、ボールゲームに必要な相手の戦略、クセなども知ることとなり、大きな成果につながっている。アジア大会では男子は連覇、女子は初優勝を目指している。女子はオリンピックの自力での初の参加権を目指す。

AS はアクロバットを強化の重点課題と位置付け、イタリア人講師を招いて強化中。また、従来の全員が揃っていることが良しとされていたシンクロから、アーティスティックスイミングに変更になったことにより、個々の能力とともにそれぞれの役割が明確化されたポジション制の考え方が必要になるため、選考方法も変更している。

OWS では、各国、最大でも男女 2 名ずつしかオリンピックに参加できないため、ターゲット選手を長期的に強化し、ワールドカップを活用し、世界で戦える戦略を含め、いろいろな環境（低水温、高水温、外海、内海等）に対応できるように強化。ロサンゼルスオリンピックを見据えては 12 月に館山で寒冷対策を実施。飛込同様ワールドカップに出て、ポイントを稼ぐ必要が出てきた。

総じて、代表クラスは海外に行く機会を増やす必要が出てきているものの、中東情勢、円安の影響もあり、数年前に比べて費用が 1.5 倍から 2 倍に膨れ上がっている状況がある。しかし、強化というものは時間がかかるものなので、ここで安易にトップにだけ資金投下を実施するとジュニア育成が出遅れ世界で戦い続けることができないため、本連盟としてはジュニア強化策も同様に大切にしている。資金に関してはクラウドファンディングやスポンサーの獲得に努めた。



競技力向上事業

<科学事業>

<医事事業>

ロサンゼルス期の初年度として、選手派遣には新たな顔ぶれの選手も加わり、世代交代を図りながら強化を推進した。各種別においては、ロサンゼルスおよびブリスベンオリンピックを見据えた新たな取り組みを実施し、課題に挑む事業も展開された。

また強化部門はその他にも、科学、医事、アンチ・ドーピングの事業で構成されており、各部門の主な取り組みは以下のとおりである。これらの取り組みは地道なものではあるが選手たちの競技力向上を支える上で欠かすことのできないものであり、様々な視座に基づき実施されている。

<科学事業>

1. 競泳の国内主要大会において、競泳委員会および日本スポーツ振興センターと連携し、科学サポートとしてレース分析ならびにレース映像の提供を実施。分析結果のネット公開に加え、競技会においてLINEを活用した映像およびデータ配信を行い、競技力向上を目的としたデータの普及・啓発を推進。
2. 競泳委員会と連携した合宿サポートとして、エリート小学生合宿およびナショナル合宿における科学サポートを実施。
3. レース分析の全国普及を図る取り組みの一環として、国民スポーツ大会会場において、固定カメラ映像の撮影およびパンニング映像の自動撮影に関するテストトライアルを実施した。撮影映像は各都道府県の科学委員に向けて配信を実施。
4. 飛込、水球、AS、OWSの各競技については、各委員会と連携し、日本選手権などの全国大会や合宿・研修会におけるサポートを実施。

5. 2025年日本水泳・水中運動学会年次大会において運営協力を行う。また、広報活動として、同学会において学会賞を受賞した研究の情報を「月刊水泳」に掲載したほか、各競技における科学サポートや関連トピックスについても寄稿し、掲載した。



Women's Health Project for Japanese Swimmers
WHP



<医事事業>

1. 競技会救護活動：国内主要大会へ救護医師の派遣および医薬品の配備。
2. 国際大会における医事運営への協力：世界水泳選手権を始めとする、年代別代表や、各種目の養成に応じて帯同医師、トレーナーの派遣。愛知・名古屋アジア大会に向けた医事運営の準備作業を開始。
3. 会議活動：2025年5月31日に日本水泳ドクター会議総会・水と健康医学研究会、11月8日に水泳競技メディカルサポート研究会をどちらもオンライン形式併用で開催。
4. 教育啓発活動：各種研修会への講師派遣、(公財)日本スポーツ協会(JSPO)公認スポーツドクター、JSPO公認スポーツデンティスト、AT養成講習会への受講者推薦を実施。
5. アンチ・ドーピング活動：アンチ・ドーピング委員会と協力して、アンチ・ドーピング活動を推進。
6. 脳振盪ワーキンググループ：動画資材を制作し、地域指導者委員会の協力を得て各加盟団体に周知。
7. WHP(Woman's Health Project for Japanese Swimmers): アスリート委員会および競技力向上コーチ委員会と連携して講習会プログラムを作成するとともに、地域指導者委員会の研修会に講師を派遣。本連盟ホームページに動画教材、教育用資材を掲載。
8. 暑熱問題対策：近年の温暖化に伴う水泳環境への影響を踏まえ、競技会運営および練習環境における安全対策の構築に向け、情報収集および研究活動に着手。

競技力向上事業

<アンチ・ドーピング事業>



<アンチ・ドーピング事業>

1. 主催・主管大会でのドーピング検査事業

(公財)日本アンチ・ドーピング機構(JADA)と連携し、主催大会においてドーピング検査(競技会検査)を実施。スムーズな検査を実施するため、国内競技団体(NF)代表役員を競技会場に派遣。なお、検査対象者はJADAおよび日本スポーツフェアネス推進機構の計画に沿って決定。

2. 世界記録・世界ジュニア記録認定のためのドーピング検査実施

国内において、多くの世界ジュニア新記録が樹立されたため、新記録認定には競技成立後24時間以内のドーピング検査が必要であることから、地方大会における新記録発生時には事前準備が重要となる。JADAと連携し、新記録発生時の検査が実施できるよう事前準備を実施。

3. ホームページ掲載資料作成および治療使用特例(TUE)書類審査

本連盟ホームページおよび競技会要項掲載用のアンチ・ドーピング資料を作成するとともに、JADAからの通達事項をホームページに掲載するなどの連携も実施。TUE申請に際し、選手およびサポートスタッフからの相談に対応し、アドバイスを実施。

4. 強化合宿・研修会などへの講師派遣(年15回) 連盟強化合宿およびコーチ研修会等において、アンチ・ドーピング講習会を実施し、派遣講師は原則としてJADA承認クリーンスポーツEducator資格保有者を派遣。

5. 競技会へのスポーツファーマシストの派遣

競技会(年7回)にスポーツファーマシストを派遣し、出場選手およびコーチ

を対象としたアンチ・ドーピングのアウトリーチ活動ならびに薬の使用についての相談対応を目的としたブースを設置。

6. JADA 会議への NF 代表役員としての参加

年数回開催されるJADAの連絡会議等に参加し、最新情報の収集にあたる。

7. JSPO 公認水泳コーチ研修会への講師派遣

コーチ4養成講習会において、アンチ・ドーピングに関する講義を実施

8. スポーツファーマシストによる医薬品相談・ホットライン体制

本連盟ホームページ上に医薬品使用可否に関する相談窓口を設置し、年間約200件の問い合わせに対応。

9. JADA 承認クリーンスポーツ Educator の養成

NF主催のアンチ・ドーピング講習の担当講師はJADA承認クリーンスポーツEducatorであることが求められている。アンチ・ドーピング委員から選拔し、JADAの研修会に参加し、複数名のクリーンスポーツEducatorを登録

10. 学術活動

第27回水と健康医学研究会にて上記活動3を検討し、演題「薬物相談事例の分析に基づく効果的なアンチ・ドーピング活動の検討」と「ジュニアオリンピック出場選手と日本選手権出場選手における目標意識の違い」を発表。

その他、今年度のトピックスとしては9月から日本スポーツ振興センターの課題解決型アスリート育成パスウェイ構築支援プログラム事業を受託した。育成から強化へつなぐという視点から、従来の年齢による強化基準だけではなく、多面的な評価による多様な育成パスウェイ(強くなる道筋)にすべく、初年度としては全国の競泳選手を対象に3000人を超える身体調査を実施し、全国11ブロックと連携することで、まずは競泳界の実態を知ろうという活動を実施した。今後も、測定をしてわかったことを各地にフィードバックをして、どこが強くなる要素となり得るかを違う視点で探していく事業として実施していく。



競技運営推進事業

2025 年度は「する」・選手が最高のパフォーマンスができる環境づくりを最優先に、「観る」・魅力ある競技会を行うことで、水泳ファンを拡大し、観客を増やすために「支える」・関係者、競技役員が一丸となって AQUA CREW として高いレベルの競技大会を目指して取り組んだ。

第 101 回日本選手権水泳競技大会競泳競技はアジア大会・パンパシフィック選手権の代表選考会を兼ねて実施。Challenge Swim Ceremony では参加した小学生たちが「挑戦することの大切さ」を体験。入場チケットは完売した日もあり観客席が賑わう大会となった。

2025 年度は本連盟主催の国際競技会の開催はなかったが、11 月 20 日から 25 日の期間で第 25 回夏季デフリンピック競技大会が本連盟協力のもと開催された。ジャパンオープン 2025 を 11 月 28 日から 4 日間の日程で開催し、海外からは 6 か国から 108 名の参加があった。

各競技の競技会ではそれぞれの委員会が主体的に競技会運営を担い、全国大会の開催にあたっては、各大会の開催地、加盟団体、JSPO、(公財) 全国高等学校体育連盟、(公財) 日本中学校体育連盟などと連絡調整を図った。特に地方

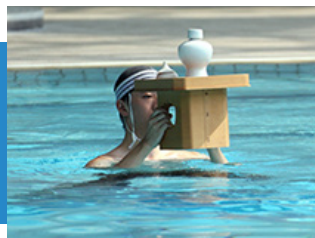
開催となる全国大会では、1 年前から開催地への競技会指導を実施し、会場レイアウトから選手動線、競技役員の動きに至るまで実地で指導を行った。

学生競技会事業として、第 72 回全国国立大学選手権水泳競技大会の大会運営においては、1 校 1 種目 3 名の参加制限枠の撤廃、開催県の特例出場を開催支部へ拡充し、各支部輪番開催を活かし、学生水泳の活性化を図った。また(一社) 大学スポーツ協会 (UNIVAS) による安心安全保障制度 (UNIVAS SSC) の認証を取得し、医療従事者の派遣費用の助成を受けた。また、全国学生選抜合同合宿を 7 年ぶりに開催。アンチ・ドーピング規則違反の再発防止のため「アンチ・ドーピング講習会」を JADA の e ラーニングシステムを活用し学生に受講させた。その他、飲酒や暴力、ハラスメント等、学生のみならず指導者も含めて啓発活動を行った。

競技規則制定事業では、2026 年 2 月 18 日に World Aquatics が、Competition Regulations を改定し即日施行した。本連盟では各競技で改正点を確認し、その周知を図った。国内での改定された規則の適用は、各競技の実情に応じて行った。



普及事業



指導者養成事業として、引き続き指導者の新規養成事業と、資格保有指導者の更新および資質向上の 2 本の柱を中心に研修事業を全国展開する中で、現在水泳を取り巻く社会的環境の変化にも対応すべく、各事業実施において全国の指導者養成事業関係者とも協力体制を取り、また JSPO との連携を取りながら実施推進した。

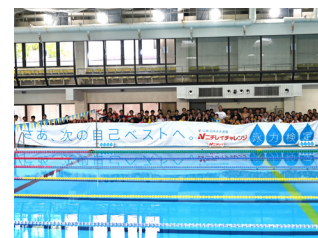
地域指導者委員会においては、基礎水泳指導員資格を起点とし JSPO 資格コーチ 1・2 の指導者養成・更新研修を、各加盟団体との協力・協働および JSPO との連携の下、取り組んだ。また 6 月には全国指導者養成委員長会議を開催し、対面での活発な情報・意見交換や課題共有など有意義な機会を創出した。

競技力向上コーチ委員会においては、JSPO との連携を軸に、コーチ 3・4 資格の更新・養成研修を、参加継続しやすい形態として、各種目別専門部分を含み対面・オンライン・オンデマンドなど各種方法で実施し、最先端の情報共有や最新の競技情報など、強化に資する内容を軸に進めた。

水泳教師委員会では、スイミングクラブ協会 (SC 協) との連携の下、水泳教師資格 (上級含む) 維持更新を推進し、自発的に学び続ける事の大切さに着目し、自主参加型のセミナーを開催、全国から約 70 名の参加者を集め、アンガーマネジメント、事故防止、実践ジュニア選手トップコーチングをテーマに充実した学びの場を提供した。

また、日本水泳連盟指導者養成事業として、免除適応校の認定を実施し人材の確保を目指す共に、第 3 期スポーツ基本計画に基づき JSPO が目指すスポーツ現場での指導者公認資格保有の義務化にも対応すべく、水泳種目における現場の状況を鑑み、また学校体育の地域移行や水泳授業の外部委託といった場面での安全・安心な指導体制を確保すべく、指導者養成事業全体の制度についても、より解りやすく取得・維持できる持続可能な制度の構築を進めていく。

国際関係として、進化を続ける World Aquatics が新しく国際競技役員 (ITO) Pathway を発表した事を受け、今後も国内から戦略的・継続的に ITO を派遣すべく、各種目における国内競技役員の現状の資格制度と連動するこ



とで、現在国内で活躍する競技役員の方々が一人でも多く国際舞台を目指していただくよう必須要件を明確化した。

さらに生涯スポーツ・環境事業では、生涯スポーツとしての水泳文化の価値向上に資する各事業を実施した。ひとつは、日本スポーツマスターズ大会 (愛媛県松山市 9 月 6 日～7 日 アクアパレットまつやま)。日本マスターズ協会及び JSPO と連携し、幅広い年齢層の生涯アスリート推進事業として実施した。水泳の日 2025 は、宮崎県宮崎市のパースルアクア宮崎にて 10 月 26 日に実施。水泳 3 団体はじめ、パラ水泳連盟、日本知的障害者水泳連盟など各関係団体と共に、水泳の魅力や楽しさに見る・触れる・体験する事業で有り、身近なスポーツ『水泳』をアピールした。

環境活動として継続して取り組んでいるのは「Wear to Fashion」である。水着やチームウェアなどのリサイクル・リユースにつなげる取り組みを各大会で実施し、参加選手・家族の皆さんに社会的環境活動への参加と情報発信を実施した。

水泳界の土台とも言える日本泳法保存事業においては、第 70 回日本泳法大会 (千葉県習志野市 8 月 23 日～24 日 千葉県国際総合水泳場)、第 73 回日本泳法研究会 (岡山県倉敷市 3 月 21 日 22 日 児島マリナプール) を例年通り開催した。その他、泳力検定、優秀団体表彰、スイムスマイルプロジェクト、アスリート委員会活動などにより、老若男女、競技レベルも幅広くあらゆるカテゴリーをターゲットとしたアプローチで、様々な水泳の普及発展に取り組んだ。

総務関係事業

2025年度の総務関係事業においては、本連盟の組織運営基盤の強化と社会環境の変化への対応を目的として、各種施策を総合的に推進した。スポーツ団体ガバナンスコードの原則に基づき、役員体制の整備を継続的に遵守する観点から役員改選を実施し、理事の改選を行い、新たな体制のもとで本連盟の運営を開始した。新体制においては、外部理事および女性理事の目標割合の確保、在任期間の適正化等を図り、多様性と透明性を備えた組織体制の構築を推進している。

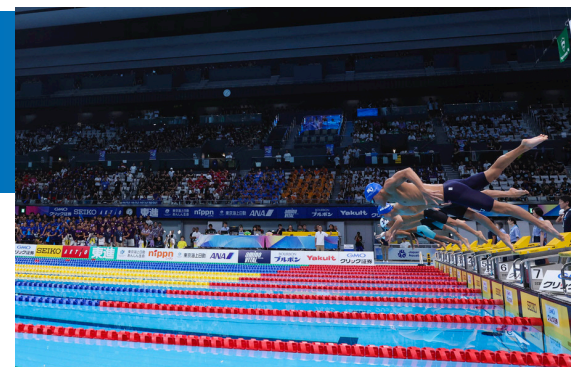
マーケティング分野においては、マーケティング代理店および大会運営支援業務に係る旅行専任代理店の選定を実施し、契約内容の見直しを行うことで、効率的かつ安定的な大会運営体制の構築を図った。また、管理本部内に新たにマーケティング委員会を設置し、戦略的な推進体制を強化するとともに、本連盟のネットワークを活用したスポンサー開拓に取り組んだ結果、新たに7社のスポンサー企業からご支援をいただき、財政基盤の強化に寄与した。これらの取り組みは、組織力と基盤強化を掲げる中期計画の方向性にも合致するものである。

制度面においては、「競技会において着用又は携行できる水泳用品・用具のロゴマーク等についての取扱規程」の改定を実施した。本改定は、2024年度に

実施した競技者の個人肖像の活用緩和に続くさらなる見直しとして、近年のスポンサー環境の変化や個人アスリートの活動領域の拡大を踏まえたものであり、個人スポンサーのロゴ掲出の解禁や掲出ルールの緩和・明確化を図ったものである。これにより、選手が主体的にマーケティング活動を展開できる環境を整備し、競技活動と経済的基盤の両立を支援する制度の充実を図った。

さらに、「持続可能な水泳授業の実施に向けた参考資料」について、スポーツ庁と連携のもと整理・発信を行い、各地域の市区町村教育委員会への周知を図った。各地域の実情を踏まえつつ、教育委員会と学校が連携し、中長期的な視野に立って水泳授業の実施体制を検討・構築することにより、子供たちの学習機会の確保が図られるよう周知した。

本年度はガバナンス強化を基盤とした組織体制の再構築と、マーケティングおよび制度改革を両輪として推進し、競技団体としての持続的成長と、選手および関係者がより活躍しやすい環境整備に取り組んだ。今後も社会の変化を的確に捉えながら、さらなる組織力の向上と基盤の強化を図っていく。



2025 年度 数字で読む日本水泳連盟 (JAQUA)

競技者登録数や団体登録数、そして公認新記録数など“数字”から日本水泳連盟 (JAQUA) の活動を分析。
これからも選手、指導者、愛好者を含めた AQUA CREW がさらに水泳を楽しめるように新しいチャレンジを続けてまいります。

■JAQUA競技者・団体・役員登録者数

競技者	104,583
団体	5,334
競技役員	3,920

■JAQUA公認プール

長水路	39
短水路	59
飛込	11
水球	1

■泳力検定

受検者数	45,268
合格者数	37,015

※2026 年 3 月末までの報告数による

■JAQUA公認記録

競泳新記録合計	124 (長水路 62 / 短水路 62)	
	長水路	短水路
日本記録	17	6
学生記録	7	7
高校記録	24	22
中学記録	10	19
学童記録	4	8

■JSPO公認指導者総数

コーチ 1	7,033
コーチ 2	1,097
コーチ 3	3,058
コーチ 4	826
水泳教師	1,809
上級水泳教師	359
JAQUA 基礎水泳指導員	1,037

■JAQUA事業規模

18 億 3379 万円

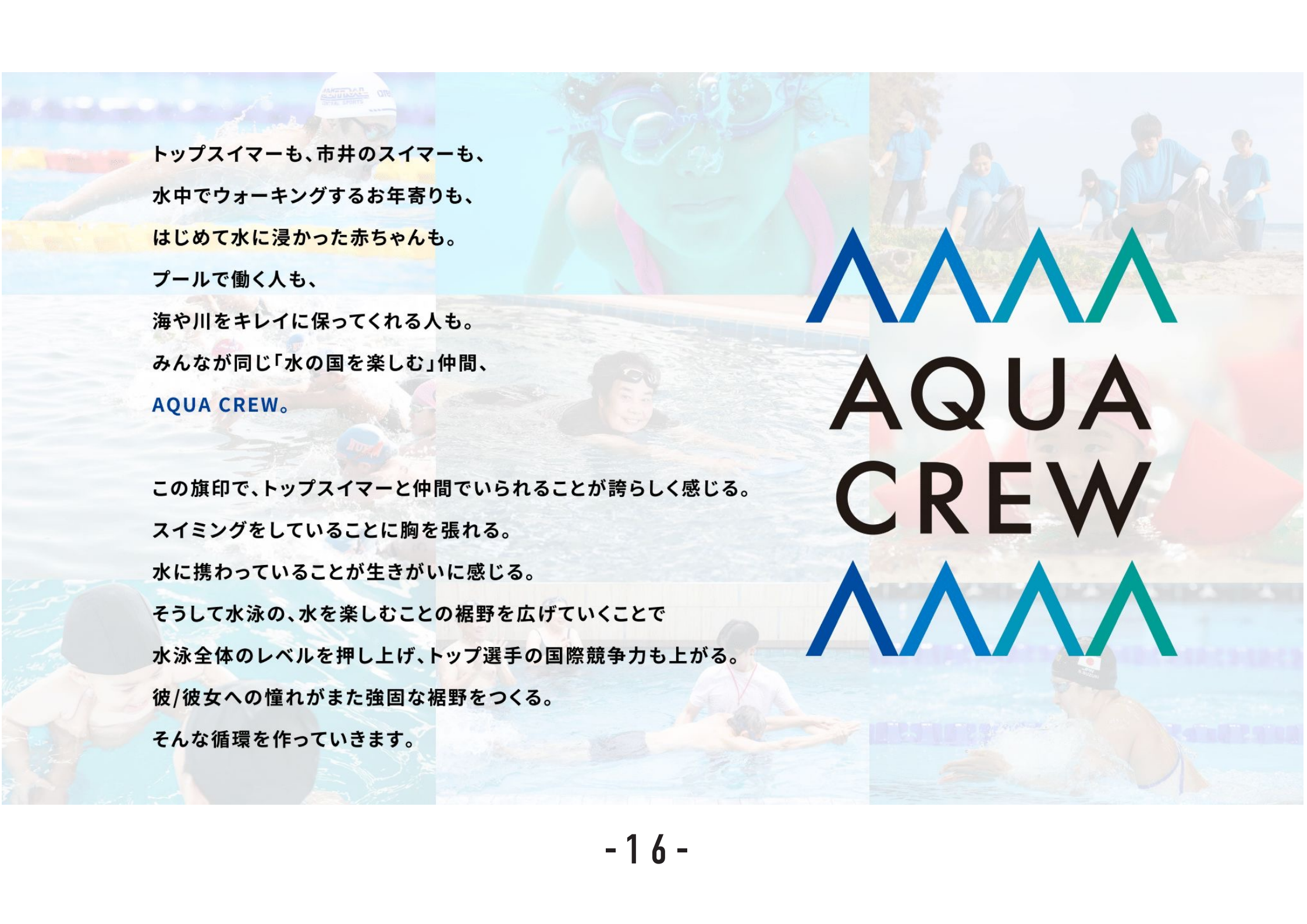
※2025 年度財務諸表等経常費用計

JAPAN
AQUATICS
MAGAZINE



Fresh Start



The background is a collage of various aquatic scenes. It includes a swimmer in a pool, a person wearing goggles underwater, a group of people in blue shirts cleaning a beach, a person swimming in the ocean, and a swimmer in a pool with a Japanese flag on their cap.

トップスイマーも、市井のスイマーも、
水中でウォーキングするお年寄りも、
はじめて水に浸かった赤ちゃんも。
プールで働く人も、
海や川をキレイに保ってくれる人も。
みんなが同じ「水の国を楽しむ」仲間、
AQUA CREW。

この旗印で、トップスイマーと仲間であられることが誇らしく感じる。
スイミングをしていることに胸を張れる。
水に携わっていることが生きがいに感じる。
そうして水泳の、水を楽しむことの裾野を広げていくことで
水泳全体のレベルを押し上げ、トップ選手の国際競争力も上がる。
彼/彼女への憧れがまた強固な裾野をつくる。
そんな循環を作っていきます。



公益財団法人 日本水泳連盟
Japan Aquatics

